会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
45(2): 122

第5回太平洋・インド洋の魚類に関する国際研究会議

ニューカレドニアのヌメアで第5回太平洋・インド洋の魚類に関する国際研究会議 (5th Indo-Pacific Fish Conference)が1997年11月3日から8日にかけて開催された．研究発表はヌメアにあるフランスの研究組織であるORSTOMで行われた．220人余りの研究者が世界から集まったが，フランスが主催国であったので当然ながらフランスの研究者が目立った．日本からは50名余りが参加した．

口頭とポスターによる研究発表は合計240件余りあった．研究発表や参加者の数の多さから判断できるように，この研究集会は太平洋とインド洋の魚類研究に大きな刺激を与えている．また，4年に一度出会うのを楽しみにしている人も多く，多くの国々の研究者が情報交換を行い，交流を深める場として定着している．

口頭発表は3会場に分かれて同時並行で行われた．また，研究発表はその内容によって14のシンポジウムと8つのワークショップに分けられていた．シンポジウムには「サンゴ礁やマングローブの魚類」，「表層性魚類」，「深海性魚類」，「軟骨魚類」，「仔稚魚」などがある一方，「寄生虫学と魚類学」というものもあった．また，ワークショップでは，「インド・太平洋熱帯域の魚類研究の今後」，「インド・太平洋の魚類の行動学」など誰が見ても研究集会に合致する内容のものと「魚毒」，「南太平洋の人と魚類の関係」という少々異質な感じのするものもあった．しかし，全体として見れば興味深い発表が多かったと思う．また，研究発表数が多かったため3会場で同時並行による発表となったのであろうが，3会場となると聞きたい発表が3つ重なった場合には2つを犠牲にしなければならない．研究集会が大きくなったので致し方ないとはいえ，参加者の評判はよくなかった．この問題を解決するためにはシンポジウムやワークショップを組織する際にテーマを絞り込むのも一つの方法であろう．実際，第一回のシドニーでは魚類の系統分類と進化というテーマに絞って研究集会が行われた．

組織委員会は研究発表の内容をフランスで出版されているCybiumに論文集としてまとめると発表し，参加者に投稿をよびかけていた．研究集会の後に組織委員会のSéretから聞いたところ，かなりの数の投稿があったそうである．第2回の東京集会，第4回のバンコク集会では論文集が出されているが，他の集会では論文集は出されていない．東京集会の論文集出版に際しては多くの研究者の協力によって短期間に校閲や編集作業を行った．論文集をよいものにするためには，編集担当の委員が相当努力をする必要がある．編集作業を行うSéret達は大変であろう．

研究集会の合間にはエクスカーションが行われた．スキューバダイビングによるサンゴ礁魚類の観察やマングローブの魚類採集を楽しんだ人たちが多かった．また，ヌメアは美しい町であり，観光客に人気がある．ORSTOMの目の前は美しい砂浜でウインドサーフィンや海水浴を楽しむ人で賑わっていた．ただ，物価が高く，食事代なども東京と同じか，やや高い感じがした．

研究集会開催中に組織委員会は次の集会の開催国を募集した．これに3つの応募があった．台湾，ブルネイ，そして南アフリカであった．組織委員会は，最終日に開催を希望する国と地域の代表に趣旨説明の機会を与え，参加者による質問が出され，若干の論議も行われた．この席でこれまでの研究集会がすべて太平洋で開かれているが，研究集会のタイトルにインド洋も入っていることを考慮すべきだという有力な意見が出された．その後，開催国決定のための選定会議が開かれ，全員一致によって南アフリカが選ばれた．他の2つも魅力的な地域であるが，インド洋の沿岸国でも開催すべきだという点で委員の意見は一致したのである．この決定は「さよならパーティー」の席上で発表された．2001年には南アフリカのダーバンで第6回の研究集会が開催される．

（松浦啓一　Keiichi Matsuura: 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1　国立科学博物館動物研究部　e-mail: matsuura@kahaku.go.jp）

魚類学雑誌
45(2): 122-123

インターネットからダウンロードできる魚類標本管理システム

全国科学博物館協議会（全科協）の中に「標本資料データベースの標準化に関する調査研究委員会」という組織がある．この委員会は活動の一環として，魚類標本管理用システムを作成し，今年7月末にインターネットから自由にダウンロードできるようにした (http://jcsm.kahaku.go.jp/JCSM/)．この委員会は国立科学博物館をはじめとして，地方自治体や民間の博物館と博物館相当

施設のキュレーターおよび大学関係者から構成されている．過去2年間に国内の博物館の標本管理に関する調査を行い，標本管理の方向性を検討してきた．この委員会が行ったアンケート調査によると，全国の自然史系博物館（自然史部門をもつ博物館も含む）の多くのキュレーターが標本管理にどのようなコンピュータシステムを使用すればよいか悩んでいることがわかった．

今日，コンピュータ使用は当たり前のことになったが，標本管理のためにコンピュータを使おうとするとソフトは何にすればよいか，ハードはどうすればよいかなど，解決すべき問題は多い．地方自治体の博物館のようにある程度の予算規模と人員を擁する組織でさえ悩んでいるのであるから，個人的努力で標本管理にコンピュータを導入しようとする場合には悩みは深刻となる．既存のアプリケーションは使用できるのか，どのアプリケーションがよいのか，ソフトを決定しても入力項目はどのように設定すればよいのか，そして入力支援機能を設ける必要はあるのかなど，問題は延々と続くのである．

今回ダウンロードできるようにしたシステムはマイクロソフトのアクセス上で動く「魚類標本管理雛形データベース」である．国立科学博物館の魚類標本管理システムを土台として作成したので使い勝手は悪くないはずである．実は科博の標本管理は別のアプリケーションソフトであるDOS用「桐 Ver. 4.0」を使用して行っていた．しかし，もはやウィンドウズが実際上の標準となっているため，委員会で検討した結果，ウィンドウズで動くシステムを開発しなければ不便であるという結論に達した．ウインドウズで動くデータベースソフトにも種類があるが，アクセスが最も広く使われている．今回のシステムでは入力項目は科博のシステムとほとんど同じで，魚類の属名と科名との対応が自動的に行える入力支援システムも備えている．これから標本管理にコンピュータを使おうと考えている人には参考になるであろう．

ただし，科博では「桐」を使い続ける方針である．このシステムを開発した後で「桐」のウィンドウズ版が販売された．科博では現在「桐」のDOS版からウィンドウズ版への移行を行いつつある．ウィンドウズ版の「桐 Ver. 7.0」はDOS版の操作性をかなり継承しているので標本管理には便利そうである．「桐 Ver. 7.0」を使用した標本管理用の入力支援機能や一括処理（マクロ処理）作成方法については別の機会に報告しようと思う．

（松浦啓一　Keiichi Matsuura: 〒169–0073 東京都新宿区百人町3–23–1　国立科学博物館動物研究部　e-mail: matsuura@kahaku.go.jp）

魚類学雑誌
45(2): 123–124

忘れられたコチ科魚類の和名

A Forgotten Platycephalid Japanese Name

Kamohara (1954)はトカラ列島宝島から得られた1個体のコチ科魚類を *Thysanophrys serratus* (Cuvier *in* Cuvier & Valenciennes, 1829)と査定し，ヒメゴチという新和名を与えた．彼は同時に，ヒメゴチの特徴として背鰭鰭条数がVIII-12である，臀鰭鰭条数が11である，側線鱗数が約60である，頭部と眼下骨の隆起線が鋸歯状であることなどを挙げた．松原 (1955)はこの記載から判断し，トカゲゴチ *Inegocia japonica* (Tilesius, 1812)に同定すべきではないかとも考えられると述べ，*T. serratus*（現在はマツバゴチ属 *Rogadius* に含められている）を日本産コチ科の検索表から除外した．松原 (1955)の後，*R. serratus* とヒメゴチの名前が日本の魚類相リストの中に含められることはなく，特に後者は現在では忘れられた和名となっている．

この度，大阪市立自然史博物館 (Osaka Museum of Natural History)に保管されているトカラ列島宝島産のこの個体（OMNH-P 345，標準体長90 mm，1953年5月26日–6月1日に採集；Kamohara [1954]の報告では用いた標本は大阪市立自然科学博物館 [Osaka Municipal Natural Science Museum]の標本として保管されていると述べられているが，この博物館は現大阪市立自然史博物館の前身であり，そこで収集保管された魚類標本が現博物館の魚類標本登録 [OMNH-P]の始まりとなっている）を観察したところ，以下の特徴を持つことが明らかとなった．すなわち，背鰭鰭条数はI–VIII–11，臀鰭鰭条数は12，側線鱗数は54（前部の3枚は1棘を持つ），第二背鰭起部から側線までの横列鱗数は6，鰓耙数は1+6=7，頭部背面に多数の棘を持つが顆粒状突起はない (Fig. 1)，眼下骨棘数は4–5 (Fig. 1)，前鰓蓋骨に前向棘を持たない，虹彩皮膜は短く複数に分枝する，間鰓蓋骨は大きく，

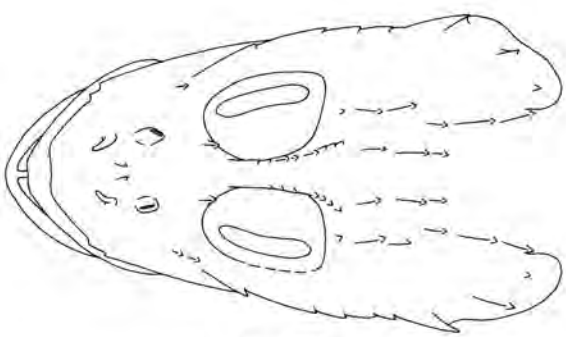

Fig. 1. Dorsal view of head of *Thysanophrys chiltonae*, OMNH-P 345, 90 mm in standard length, collected from Takara-jima Island, Tokara Islands, Japan (mistakenly identified with *Thysanophrys serratus* by Kamohara [1954]).

後方に広がる，側線鱗は2個の開口部を持つ，眼上皮弁を持たない(Fig. 1)，頬部は眼下骨と前鰓蓋骨から伸びる感覚管によって完全に覆われることなどである．これらの特徴を持つコチ科魚類は *Thysanophrys chiltonae* Schultz, 1966のみである(Schultz, 1966; Knapp, 1984, 1986; Shao and Chen, 1987; Imamura, 1996)．なお，*Rogadius serratus*は頭部背面に棘と顆粒状突起を持つ，眼下骨上に鋸歯状の隆起線を持つ，前鰓蓋骨に短い前向棘を持つ，虹彩皮膜は二葉形であるなどの特徴を備えることから(Imamura and Amaoka, 1996)，本標本とは明らかに異なっている．したがって，Kamohara (1954)は誤同定を行い，さらに当時はまだ未記載種であった*T. chiltonae*に対してヒメゴチの和名を与えたことになる．一方，本種にはIda and Yunokawa (1980)によってクロシマゴチの和名も与えられている．この和名は図鑑類などにも用いられており(落合，1984; 中坊，1993; 今村，1997a)，一般化している．また近年，クロシマゴチ属を*Thysanophrys*の和名として用いることも提案されていることから(今村，1997b)，古い和名を優先させ*T. chiltonae*と同定されるべき種に対してヒメゴチを用いると，多くの混乱が生じることとなる．よって本報では*T. chiltonae*と同定される種に対しては，従来通りクロシマゴチの和名をそのまま用いることを提案する．

引用文献

Ida, H. and K. Yunokawa. 1980. Karyotypic variation found among five species of the family Platycephalidae. Japan. J. Ichthyol., 27: 122–128.

Imamura, H. 1996. Phylogeny of the family Platycephaliae and related taxa (Pisces: Scorpaeniformes). Spec. Div., 1: 123–233.

今村　央．1997a．クロシマゴチ *Thysanophrys chiltonae*．岡村収・尼岡邦夫（編・監修），p. 220. 山渓カラー名鑑“日本の海水魚”山と渓谷社，東京．

今村　央．1997b. *Thysanophrys*の和名．魚類学雑誌，44: 62–63.

Imamura, H. and K. Amaoka. 1996. *Rogadius serratus* (Cuvier, 1829), a senior synonym of *R. polijodon* (Bleeker, 1853) (Scorpaeniformes: Platycephalidae). Ichthyol. Res., 43: 97–100.

Kamohara, T. 1954. A list of fishes from the Tokara Islands, Kagoshima Prefecture, Japan. Publ. Seto Mar. Biol. Lab., 3: 265–299.

Knapp, L. W. 1984. Platycephalidae. 22 pp. *in* W. Fischer and G. Bianchi, eds. FAO species identification sheets for fisheries purposes. Western Indian Ocean (Fishing area 51). Vol. 3. FAO, Rome.

Knapp, L. W. 1986. Family No. 155: Platycephalidae. Pages 482–486 *in* M. M. Smith and P. C. Heemstra, eds. Smiths' sea fishes. Macmillan, South Africa.

松原喜代松．1955．魚類の形態と検索．石崎書店，東京．xi+v+1605+viii pp., 135 pls.

中坊徹次．1993．コチ科．中坊徹次（編），pp. 535–539, 1299–1300. 日本産魚類検索．全種の同定．東海大学出版会，東京．

落合　明．1984．コチ科．益田　一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝弥・吉野哲夫（編），pp. 307–308. 日本産魚類大図鑑．解説．東海大学出版会，東京．

Schultz, L. P. 1966. Platycephalidae. Pages 45–62 *in* L. P. Schultz and collaborators. Fishes of the Marshall and Marianas Islands. Bull. U. S. Nat. Mus., No. 202.

Shao, K.-T. and J.-P. Chen. 1987. Fishes of the family Platycephalidae (Teleostei: Platycephaloidei) of Taiwan with descriptions of two new species. Bull. Inst. Zool. Acad. Sinica, 26: 77–94.

（今村　央　Hisashi Imamura: 〒031-0841 青森県八戸市鮫町下盲久保25-259　水産庁東北区水産研究所八戸支所　e-mail: hima@myg.affrc.go.jp; 波戸岡清峰 Kiyotaka Hatooka: 〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-23 大阪市立自然史博物館　e-mail: hatooka@mus-nh.city.osaka.jp）

会記・Proceedings

魚類学雑誌
45(2): 124–140

1999年度　年会のお知らせ

1999年度年会の予定をお知らせします．詳細は1999年5月に出版される魚類学雑誌46巻1号に掲載します．

期　日：1999年10月8日（金）-10月11日（月）
　　8日　編集委員会・評議員会
　　9–11日　研究発表会およびシンポジウム

会　場：九州大学（法文系キャンパス）
　　〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

備　考：市内ホテルを申し込み者に限り年会事務局で斡旋する予定です．

シンポジウムの申し込みについて

1999年度年会でシンポジウムを計画されている会員は下記の要領で申し込み書類を作成し，郵便で事務局までお送りください．会場および日時の制約上多数の申し込みがある場合には調整を計りますので，あらかじめご了承下さるようお願いします．

これまでシンポジウムの要旨は魚類学雑誌に掲載されていま